

認するという指摘しており、本稿でも作業者が指示者の説明を待つことなく、作業を自発的に開始することが確認された。

最後に、日・英語発話のブロックの配置における誤りの違いが日英語の構文に起因する可能性を示唆したい。以下の例は上記の例(2)、(3)の一部で、ブロックの配置に誤りが生じた箇所である。

(4) you put a yellow one on top of the left side blue one, but you put it so that there's two facing over the edge.

(5) で横に跳びぬけるように左右に 青の正方形. あ えっと赤の長方形にくっつけます。

(4)のように英語の場合、左右の大まかな場所といった大局的な説明がなされたあと、結果の状態を示す配置の詳細な部分の伝達が行われる。つまり、on top of でどの層かという位置が伝達されると、詳細を待たずに、作業者はブロックを一番もっもらしい場所に配置し、結果として間違いを生じさせている。一方、(5)のように、日本語の場合は結果の状態の説明が先にくるため、どのような形でブロックを左右に配置するのかの説明がまず伝達され、次にどこの層に置くのかといった配置場所の指示が続く。そのため、形状は正しいが、配置場所に誤りが生じている。谷村、仲本、吉田 (2018)では、構文上の日英語の違いによる情報構造の違いを指摘しているが、日英語の情報構造上の違いが、日英語の課題参加者の行動の違いに反映されることが本稿で示された。

5. 結論

本稿では、自己中心的参照枠で、基点となる相対的な位置が課題参加者両方で共有され、そのあとに探索項目の同定がなされるという仮説をもとに、日・英語の課題遂行対話におけるブロックの配置を分析した。結果、例2と3にみられたように、日・英語とも、作業者は自発的に探索的に作業を行うこと、修正が必要な場合には誤ったブロックの配置を基点に再配置が行われることが示された。このような日・英語の課題達成対話を詳細に比較分析した研究はまだなく、空間関係と情報構造の関係を明らかにするうえで意義があると考えられる。今回は、対面条件場面における分析に限ったが、非対面場面における自己中心的参照枠の特定は曖昧性を伴うことから、さらに複雑なやり取りが予想される。今後は、非対面場面における課題参加者による空間位置の特定方法について議論していきたい。

謝辞 本稿の執筆にあたり細間宏通先生から有益なコメントを頂きました。また、データの整理、分析にあたりアレクサンダー フォード氏に協力頂きました。感謝いたします。本研究はJSPS 科研費 17K02953 の助成を受けたものです。

参考文献

- Alibali, M. W., Kita, S., and Young, A. J. (2000). Gesture and the process of speech production: We think, therefore we gesture, *Language and Cognitive Processes* 15(6), 593–613.
- Clark, H.H., and Krych, M.A. (2004). Speaking while monitoring addressees for understanding, *Journal of Memory and Language* 50(1), 62-81.
- Hart, R. A. & Moore, G.T. (1973). The development of spatial cognition: A review. In P. M. Downs, & D. Stea (Eds.), *Image and Environment: Cognitive Mapping and Spatial Behavior*, pp. 246–288, Chicago: Aldine Publishing.
- Haviland, J. B. (2000). Pointing, gesture spaces, and mental maps. In D. McNeill (Ed.), *Language and gesture*, pp.13-46. New York: Cambridge University Press.
- 細馬宏通 (2003). 対面会話におけるジェスチャーの空間参照枠と左右性 社会言語科学会第 11 回研究大会予稿集 209-212.
- 細馬宏通, 石津香菜, 繁松麻衣子, 中村智代, 矢野雅人 (2004). 身体を示し合う会話—自分の身体で相手の身体を語ること— 社会言語科学会第 14 回大会発表論文集 67-70.
- Levinson, S. (1996). Frames of reference and Molyneux's question crosslinguistic evidence. In P. Bloom & M. Peterson (Eds.), *Language and Space*, pp. 109-169. Cambridge: MA MIT Press.
- Özyürek, A. (2000). The influence of addressee location on spatial language and representational gestures of direction. In D. McNeill (Ed.), *Language and Gesture*, pp.64-83. New York: Cambridge University Press.
- 谷村緑, 仲本康一郎, 吉田悦子 (2018). 課題達成対話における談話構造の違い—目的を表す「ように」と「so that」を中心に— 社会言語科学会第 41 回研究大会予稿集 186-189.
- 吉村浩一 (2002). 逆さめがねの左右学 ナカニシヤ出版